

韓国慶尚北道の旅

下田路子

(広島大学理学部)

韓国慶尚北道にある安東市と慶州市を1989年8月に訪ねた(図1)。安東大学の宋鍾碩博士のご案内で、安東市と周辺地域のため池や川の水草を見ることができた。滞在期間が短く調査した場所もわずかではあるが、この地域の水草が日本で紹介されたことはないと思われるので報告しておきたい。また各地で印象に残った景観や植生にもふれたいと思う。

釜山から安東へ(8月20日)

8月20日の午後、福岡空港を夫と共に立った。一時間たらずのうちに韓国が見えてきた。飛行機から見ると海沿いの土地利用はすさまじく、また海岸近くの海や洛東江の河口は水がずいぶん汚れているようだった。

洛東江の中洲にある金海国際空港に宋博士が迎えに来て下さった。空港の建物を出ると、目の前にそびえている山々は岩肌がむきだしで、まばらにマツが生えていた。瀬戸内海沿岸のはげ山と似ていると思った。

釜山の高速バスターミナルから大邱行きの高速バスに乗った。空港から釜山市内へ向かうバスから見ても、高速度バスに乗ってからも、水田は耕地整理が進み、きれいな四角形の水田が広い平野に整然と並んでいた。高速度バスから見える山々の斜面や尾根は岩がむきだしで、やせたアカマツ林でおおわれている。山裾のマツは大きいので土が深くなっているのであろう。

車道沿いにリンゴ園が多かった。慶尚北道はリンゴの主産地であり、安東一帯でもリンゴ園はよく見かけた。

慶州近くの道路脇に、水草のあるため池や水が干上がった池がいくつか見えた。

釜山から約二時間で大邱に着き、今度は安東行きの高速度バスに乗った。バスは高速度バスに負けない猛スピードで暗くなった道を走り続けた。約2時間後の9時半ごろ前方にあかりが見え、安東市に着いた。

安東湖と河回村(8月21日)

前日はよく晴れていたのに、21日は朝から雨だった。宿に迎えに来て下さった宋博士の自動車で、まず安東湖に向かった。市街地の東方にある安東湖は、高さ83m、



図1. 韓国慶尚北道と主な地名.

長さ612mのダムでせきとめられ、総貯水量は12億4,800万tである。湖は南北に細長く、南端から北端まで約20kmある。ここは魚釣りの名所とのことで、水辺にテントをはって泊まりこみで魚を釣っている人もいた。湖の周囲はかなりの傾斜であるが、段々畑や農家が点在している。水没地区の農家を移築した民俗村がダムの近くにあったので見学した。

安東湖をあとにして、洛東江の支流である半辺川に沿って走ってみると水中に水草が見えるので、次の日に調査することにした。

今度は、安東市の西方にある河回村に行った。河回村

は韓国の伝統的な社会を今でもとどめており、村ごと国の文化財に指定されているとのことだったので、この機会にどうしても見たかった所である。村は北、西、南の三方を緩やかに流れる洛東江に囲まれて、まるで小さな島のようなのである。わら葺き屋根に土壁の小さな家もあれば、土塀をめぐるし、瓦葺きで白壁のりっぱな家もある。サルスベリの花があちこちの庭で咲いていた。

路傍や畑の雑草は日本で見るものと変わらないようであったが、畑にトウガラシやゴマを植えている所が多いのは日本と違っている。食堂、土産物屋、旅館はあるが、けばけばしい看板など無いので一般の民家とたいして変わらない。

村の小道を歩き回ったり家々を見学したあと、村では割合に大きな家に上がり込んで食事をした。

食事の後、河回村近くの三つのため池を見た。どの池にも水草があったので、次の日に調査することにして、今度は鳳停寺に向かった。鳳停寺は安東市の北西10 km 余り、天燈山(574m)の南麓にある古い寺である。寺の周りはいももりとした林になっており、大木は保護されているとのことだった。

この日は一日中雨であったが、宋博士のおかげでこのあたりのたくさんの農村を見ることができた。どこを走っても道路に沿ってシラカバ、ポプラ、ヤナギなどの並木が続き、広々とした水田の向こうには、しばしば岩肌が見える山がそびえ、白い壁の農家が点在し、大変美しい景観となっていた。教会が多いこと、トウガラシやキキョウの栽培をよく見ることなどは日本の農村と違う点だ。

川と池沼の水草(8月22日)

翌22日も朝から雨だった。テレビのニュースは各地の水害の様子を伝えており、イネが泥をかぶっているのを写していた。このような大雨が続くのは珍しいとのことだった。しかし、宋博士にも私たちにも時間の余裕がないので水草の調査に出かけることにした。

1. 半边川(安東市松川洞)

まず前日見た半边川に行った。市街地の東方、安東大学に近い所に車を止め、川に降りた。川幅は300mくらいで、東から西へゆったりと流れている。連日の雨で水が増え、中洲や川原は水に浸っている所が多い。

水中にはササバモが密生し、これにクロモ、イバラモが混生して沈水群落を作っていた(図2)。またわずかながらヒシも見られた。水辺にはケイヌビエが多く、そのほかイシミカワ、ミゾソバ、ヤナギタデなどのタデ類、アメリカセンダングサ、タコノアシなどが生育していた。この地点より約500mほど下流の水が淀んだ所にはヒシが優占し、水中にはイバラモ、エビモ、クロモ、ホザキノフサモ、マツモ、水面にはアオウキクサ、ウキクサが見られた。

今回見た限りでは、慶尚北道の河川は日本ほど改修工事が行われていないため、曲がりくねった流れ、広い中洲や川原、草におおわれた川岸、流れに沿った河畔林などがごく普通に見られ、動植物相もさぞ豊かであろうと思われた。

2. 真安の沼沢地(青松郡真宝面真安里)

半边川をあとにして、東に向かった。安東湖の南方に臨河ダムを建設中で、高い所に新しい車道ができ、移転

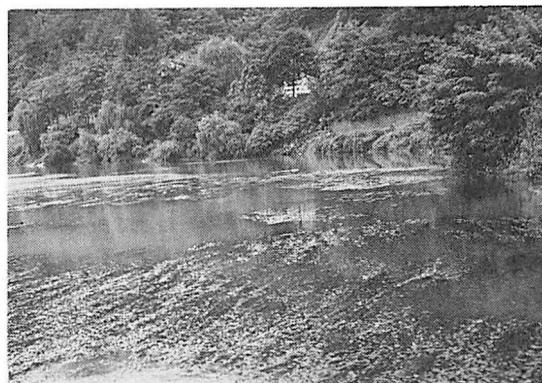


図2. 半边川のササバモが優占する沈水植物群落。



図3. 沼沢地に群生するミズアオイ。



図4 デンジソウ。水に浮かぶ浮葉と水辺で立ったもの
とを見ることができる(ソソフル池)。



図5. サンショウモ(ソソフル池)。

がすんだ集落もあった。

真安の町並みを過ぎてまもなく、水田地帯の中に小さな沼沢地があった。沼沢地は水田一枚分くらいで、中心部は浅い水たまりになっていた。水中にはヒルムシロ、ヒシ、アオウキクサ、ウキクサが生育していた。水たまりの周辺にミズアオイが群生して、ちょうど花盛りであった(図3)。挺水植物ではアシカキが最も多く、水たまりを取り巻いて密生しており、ヒメガマ、サンカクイ、デンジソウも個体数が多かった。そのほかに目についた植物はアメリカセンダングサ、イボクサ、サナエタデ、セリ、タカサブロウ、ヌマガヤツリ、ミゾソバ、ヤナギタデなどで日本の湿地でも見られたものが多かった。

私が水の中を歩き回っているのを見ていたおじいさん

の話では、ここには以前は水がたまっており、水が少なくなってから水草が生えてきたとのことだった。

3. 安東郡のため池

真安から安東市にもどり、今度は安東市の西方、安東郡の農村のため池を見た。前日、河回村の帰りに見た三つの池と晩雲池を訪ねたが、これらの池の集水域には水田や農家があるため、農薬・肥料・下水などが流入していると考えられる。

a. ソソフル池(豊山邑素山里)

ソソフル池は南端を約150mの堤防でせきとめられ、南北の長さは約300mである。池の東岸は集落と接しており、牛小屋の汚水が池に流れ込んでいる所もあった。

池中央部の水面にはヒシが、また北端の水が浅い所にはアシカキとウキシバが群生していた。池に流れ込んでいる水路や池の水辺には、デンジソウが群生していた(図4)。また浮遊植物のサンショウモ(図5)、アオウキクサ、ウキクサも見られた。

北端の湿地では、ケイヌビエとサナエタデが優占して背の高い草本群落を作っていた。草の中にはバク類が多く、歩くたびに足下からワーンと飛び立つほどで、草の葉がよく食べられていた。池のほとりで見ていた村の人が、私たちがイナゴを取りにきたのかと宋博士に聞いたとのことだった。

b. 名称不明の池(豊川面佳谷里)

ソソフル池の西方約1.5kmの所にある、堤防の長さ南北の長さが共に約150mの池である。東岸にヤナギの大木があった。池の水は少なく、湿った泥の上にはマツバイ、ミコシガヤのほか、エビモ、アオウキクサ、ウキクサが見られたが、中央の水面には水草は見えなかった。泥地の上方にはアシカキ、ショウブ、セリ、ヨシなどが生育しており、満水時にはここまで水が来るのであろう。

c. 女子池(豊川面佳谷里)

上記の池のさらに西方1km、河回村の真北約2.5kmの所にある女子池は、池の東端を約300mの堤防がせきとめ、東西に約1kmある大きなため池である。雨が続いて池の水が増え、挺水植物群落も水に浸り中には入れなかったため、南岸から西岸に沿った道路から観察した。池の中央にはヒシが群生していた。

西岸では水中から岸に向かって次のような群落が見られた：ヒシ群落→アシカキ群落→マコモ群落→ヨシ群落。

水草はヒシのほかクロモ、サンショウモ、ヒルムシロ、ホザキノフサモ、マツモを確認した。また、ここでもデンジソウが水中から水辺にかけて群生していた。

西岸から南岸にかけては、このほかアゼムシロ、ウキシバ、ウシノシッペイ、ケイヌビエ、ショウブ、サナエタデ、ミコシガヤなどが生育していた。

d. 晩雲池（豊山邑晩雲里）

ソンプル池の北東約4kmの山あいにある晩雲池は、女子池よりさらに一回り大きい。谷が水没して水が深いためであろう。水草はヒシが少しあるだけだった。入江の水が浅い所にはアシカキとウキシバが群生していた。

4. 義城郡のため池（義城郡義城邑五老洞）

次に安東市の南方の義城に向かった。義城への道の両側には岩山が多い。岩は赤みがかって層になっており、雨水が岩の上を滝のように流れている。この岩壁にはおそらく特有の植物群落が見られ興味深いことと思うが、調査は非常に危険である。

義城の市街地をぬけて、さらに2km余り南下すると、道路の左側に堤防が約200m、南北に約300mのため池があった。西岸から見ると、水中にはエビモ、クロモ、ヒシ、デンジソウが生育していた。また水辺にはマコモが群生していた。

さらに1km余り南下すると、今度は道の右側に長さ100m、幅50mくらいのため池があった。水面にはヒシが密生し、ホザキノフサモ、マツモもあった。また水が浅いところにはデンジソウがあった。

5. 水草相の特徴

この日見た水草を生育地別にまとめると表1のようになる。

池や沼沢地などの止水域に限られた種のうち、サンショウ

ウモ（図5）は二ヶ所、デンジソウ（図4）は五ヶ所に生育し、個体数も多かった。日本ではサンショウモは「減少が著しい」種、デンジソウは「絶滅に向けて進行している」とみなされる種とされ、またタコノアシ、ミズアオイ（図3）も後者に入れられる（我が国における保護上重要な植物種および植物群落の研究委員会植物種分科会 1989）。一方韓国では、慶尚南道南部の沼沢地（鄭・崔 1987）や、洛東江下流地域（李ほか 1987）からもサンショウモ、デンジソウ、ミズアオイの生育が報告されており、これらの種は安東市周辺だけでなく、ほかの地域でもよく見られるようだ。

宋博士は韓国でも農薬の使用量は多いと言っておられたが、除草剤の種類や使用量が日本と違うために、水草相にも差があるのではないだろうか。

慶州と南山（8月23—25日）

翌23日の朝、宋博士に見送られて安東駅から新羅の古都慶州行きの列車に乗った。各駅停車の列車はドアをあけたままで走っていたが誰も知らん顔をしていた。沿線の山々はしばしば赤味がかった層状の岩がむきだしになっており、前日に安東から義城への道で見たものとよく似ていた。山裾や中腹には土を丸く盛り上げた墓がたくさん見える。山裾に大きなマツが群生し、下草が刈ってある所は必ず墓地であった。

慶州市に着いて宿を決め、昼食をすませた後、郊外にある仏国寺と石窟庵に行った。仏国寺は新羅時代の仏教文化を代表する建造物である。また吐含山（745m）の中腹にある石窟庵の釈迦如来坐像は、ガラス越しで見られないがすばらしい石仏であった。

夕方、駅近くの市場に行ってみた。女の人们が道端でモモ、リンゴ、ブドウ、ネクタリン、マクワウリ(?)などを山に盛って売っている。木の実や干した草も売っ

表1. 安東市および周辺地域の水草と生育地

生育地	水草
半辺川	イバラモ (1), ササバモ (1).
半辺川と池沼	ヒシ (7), アオウキクサ (4), ウキクサ (4), エビモ (3), クロモ (3), ホザキノフサモ (3), マツモ (3).
池沼	デンジソウ (5), サンショウモ (2), ヒルムシロ (2).

() 内の数字は生育を確認した場所の数。

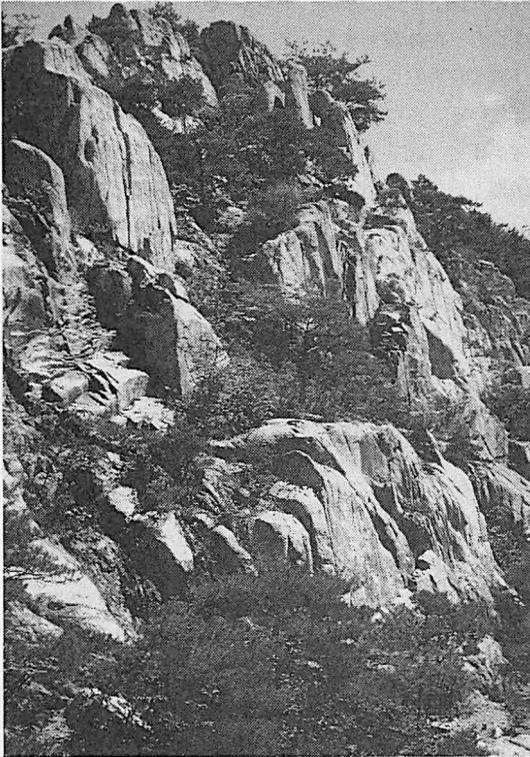


図6. 南山の岩峰.

ていた。これは漢方薬であろうが、言葉がわからないので聞くことができなかった。市場の中には衣類、雑貨、食料品などの小さな店がたくさんある。魚屋では生け簀にウナギ、コイ、ドジョウ、ナマズ、カメなどを入れて売っていた。朝鮮人参や木の皮、キノコ類などを売っている漢方薬の店もある。穀物を売っている店には、米やいろいろな豆のほか、大麥粒の小さな種子が何種類もあったが、私には何かわからなかった。

翌24日はやっとよい天気になったので、市街地の南方にある南山に登ることにした。標高465mの南山を中心とする花崗岩の山地は、山中に数多くの石仏、石塔、寺址があることで知られている。

南山の西山麓でバスを降りた。三つの円墳（三陵）のそばを通り過ぎると、道は細く傾斜は急になった。アカマツのほか、ハギやツツジ類、サルトリイバラ、ススキ、トダシバ、ママコナの一種などが生育しており、大小の花崗岩の岩塊や地表にあらわれた真砂とともに、広島県で見慣れたアカマツ林とよく似た景観となっていた。

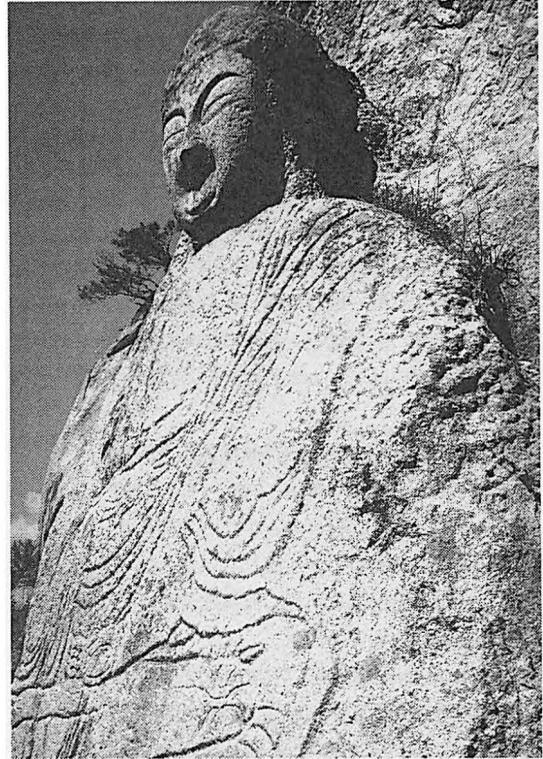


図7. 磨崖釈迦如来坐像. 南山三陵渓谷の岩壁に彫られた、高さ約5mの石仏.

やがて大きな岩に浮き彫りにされた観音菩薩像、岩に刻まれた六尊仏と次々に石仏と出会うようになった。そして目の前には、これから登っていく急斜面の岩山が見えている。真っ青な空、まぶしい花崗岩の白、アカマツの緑は「美しい」というよりも「ものすごい」眺めで（図6）、新羅時代にここが仏教の聖地とされたのがよくわかる気がした。

岩壁に彫られた巨大な釈迦如来像（図7）を過ぎるとまもなく尾根に出た。反対側の東斜面は、西斜面のような「ものすごい岩山」という感じではなく、林道があり、アカマツの生育はよく、低木も多かった。道の脇にはオトコエシ、オミナエシ、ツリフネソウ、ヒヨドリバナなどが咲いていた。

山を下る途中で出会った6人の大学生が、南山地域の南端の七仏庵に行くのに同行してくれることになった。彼らは拓本の研究のために、山中でキャンプをしながら南山の石仏を見ているとのことだった。

山を降りて山裾の集落を横切り、また山に入った。き

れいな水の谷川に沿って登っていくと、背中が緑で腹が赤いスズガエルがたくさんいた。

谷川から離れて急な坂道を登ると七仏庵に着いた。皆で石仏に手をあわせたあと、石仏の後ろの岩をよじ登ると、崖の上に優しい顔の菩薩半跏像が浮き彫りになっていた。ここからは慶州の平野や南山の岩峰がみわたせ、一同歓声をあげた。学生たちは拓本をとり始めたが、風が吹いてなかなかうまくいかなかった。

私たちは親切にもらった礼を言って、先に崖の下に降りた。小さな男の子を連れた女性が、石仏の前に座ってお経を読んでいた。

南山の山中には道標が少なく、しかもそのわずかの道標はハングル文字で書いてあったので、韓国語のわからない私たちにとっては歩きやすい山ではなかった。しかし、すばらしい景観、ごみ一つ無い山道、次々と出会う石仏、親切な大学生たちのおかげで大変気持ちよかった。

石仏のいくつかは絶壁に彫られており、昔の人はいったいどのようにしてこの岩を刻んだのだろうかと思議であった。いずれにしても人々は命がけであったにちがいない。今でも石仏の前には線香や供え物が置いてあったり、ろうそくの火がともっていたりし、山の中の小さな寺には人が住んでいた。南山で過ごしたこの日は、韓国の人たちの仏に対する思いを感じた一日だった。

山をおりた所にため池があり、岸からヒシとマツモが見えた。農家の庭にはトウガラシが干してあり、畑ではゴマを刈り取っていた。

慶州最後の日は市内の観光をした。古墳公園、東洋で

最古の天文台である瞻星台、半月城、石氷庫、慶州博物館に行った。半月城の堀にはハスが生育しており、水面にはサンショウモとウキクサ類が密生していた。

昼食後、釜山行きの列車に乗った。線路沿いのため池がいくつか見えた。釜山に近くなったころ、セリを栽培している所があり、水に入って収穫中の人もいた。海岸に出ると、海辺に沿ってずっと鉄条網がはってあり、兵の姿も見えた。

翌26日の朝、釜山のホテルを出発し帰国した。

韓国で大変お世話になり、帰国後も文献や資料をお送り下さった宋鍾碩博士、韓国の水生・湿生植物に関する文献をお送り下さった崔斗文教授、韓国語の文献を訳していただいた韓久美氏、水草を同定していただいた角野康郎博士に厚くお礼申し上げる。

引用文献

鄭英昊・崔鴻根、1987. 咸安所在 自然沼の水生管束植物相 (原題 韓国語). Korean J. Environ. Biol. 5 (1): 17—28.

季永魯・季南淑・余星姫、1987. 洛東江下流地域の植物相 (原題 韓国語). 韓国自然保存協会調査報告書 26: 121—141.

我が国における保護上重要な植物種および植物群落の研究委員会植物種分科会 (編). 1989. 我が国における保護上重要な植物種の現状. 320 p p. 日本自然保護協会・世界自然保護基金日本委員会, 東京.

○立花吉茂著『水辺の草花』(淡交社、1990年3月、95頁、2500円)

日本の水草を、カラー写真に類書とは一味ちがった解説を付して紹介した新刊である。「水辺に立って目につきやすい、また美しいものを選んで解説することにした。」とあるように、本書は日本の水草の全てを取りあげているわけではない。浮葉性グループ(20種)、浮遊性グループ(3種)、抽水性グループ(63種)、湿地性グループ(24種)の順に計90種が選ばれている。その中にはウォーターポピーやオオオニバスなど国内で栽培される外来水草が多く含まれる。沈水植物は対象外となり含まれて

いない。巻頭には「ガマの穂の効用」、「食べられる水草」など7編のコラム、巻末には水草の育て方について、著者の長年の経験にもとづく親切的な説明がある。

本質的なことではないかもしれないが、写真と解説のあか抜けしたレイアウトは、ページを繰る楽しさを倍加させてくれる。
(角野康郎)